

## P-113

褥瘡対策の取り組み～OT・PTの役割を通して～

福岡赤十字病院 リハビリテーション科<sup>1)</sup>、  
福岡赤十字病院 看護部<sup>2)</sup>

さかい かずお 堀 和生<sup>1)</sup>、岩倉 将<sup>1)</sup>、石井美紀子<sup>2)</sup>、  
濱田 利香<sup>2)</sup>

【目的】当院は地域の中核的役割を有する509床の急性期病院で、作業療法士(OT)・理学療法士(PT)が褥瘡対策委員会に参画している。平成22年度、整形外科病棟の褥瘡発生件数が多いため、リハビリテーション科と病棟看護師が連携し、ポジショニングや福祉用具の活用など褥瘡対策に取り組んだ。今回の取り組みを通してOT・PTの役割や今後の課題について若干の知見を得たので報告する。

【倫理的配慮】個人が特定されないように配慮した。

【活動内容】褥瘡対策をOT・PTの視点から、(1)平成21年度褥瘡発生者の情報収集と現状分析。(2)皮膚・排泄ケア認定看護師や病棟看護師との情報交換、具体的対策の提案。(3)ポジショニングや福祉用具の勉強会。(4)病棟での実践。(5)取り組みの評価として病棟看護師へアンケート。と段階的に一年間を通して進めていった。

【結果】アンケートより、整形外科病棟の特徴を把握した上で、ポジショニングや福祉用具の活用意義が再認識され、活用頻度が増加、定着した。又、福祉用具の追加購入や効果的な使用方法が検討された。勉強会での専門的知識の習得は実践への自信に繋がっており、継続が求められている。平成22年度の褥瘡発生件数は減少に至らなかった。発生要因は下半期にかけ、コルセットやシーネ、ルート類の固定に伴う外的刺激によるものが多い傾向であった。

【まとめ】褥瘡対策においてOT・PTの役割を実践した。この実践が褥瘡対策における病棟看護師の意識の変化や行動変化の一要因となった。今後もより多角的な視点から、リハビリテーション科としてさらに充実した活動に繋げていきたい。

## P-115

介護老人保健施設における不眠とリハビリテーション実施状況の関係

伊豆赤十字病院 リハビリテーション課<sup>1)</sup>、  
伊豆赤十字介護老人保健施設グリーンズ修善寺<sup>2)</sup>

いぐら ゆうこ 居倉 裕子<sup>1,2)</sup>、井上 義文<sup>1,2)</sup>、松井 紀道<sup>1,2)</sup>、  
関口 夏紀<sup>1,2)</sup>

【目的】「入所」という環境の変化が、入所者の睡眠および個別リハビリテーション(以下、個別リハ)の施行状況に与える影響について、調査・検討を試みた。

【方法】平成23年2月から4月に入所し、個別リハを開始した14名(性別:女性9名・男性5名、平均年齢:83.8±9.5歳、平均要介護度:3.2±1.1、HDS-R:11.2±6.9)を対象とし、入所から2週間の睡眠状況と個別リハ施行状況について調査した。調査後、睡眠状況を、夜間の覚醒回数が3回以上かつ8日以上観察された場合を不良群、それ以外を通常群とし、この2群について個別リハの施行状況を比較・検討した。

【説明と同意】入所者・家族には、研究の趣旨、調査データの使用について、十分な説明を行い、同意を得た。

【結果】通常群は8名(性別:女性4名・男性4名、平均年齢:82.6±9.5歳、平均要介護度:3.0±1.1、HDS-R:11.9±8.4、転落経験:2名)、不良群は6名(性別:女性5名・男性1名、平均年齢:85.3±10.2歳、平均要介護度:3.5±1.0、HDS-R:10.3±4.9、転落経験:4名)であった。個別リハが予定通り施行不可能であったのは、通常群3名・37.5%、不良群2名・33.3%。個別リハ施行時の不眠の訴えは、通常群0名・0%、不良群1名・16.7%。個別リハ施行時の体調不良の訴えは、通常群6名・75%、不良群4名・66.7%。精神機能面の問題が個別リハの障害因子となったのは、通常群2名・25%、不良群4名・66.7%。

【考察】今回の調査では、不良群は、睡眠状況が必ずしも「不眠の訴え」として顕在化せず、「だるい」等の訴えや集中力の低下といった形で個別リハに影響を与えていた。通常群においては、「疲れている」「痛い」等の体調不良の訴えが多く、様々な要因が個別リハの施行状況に影響を与えていることが示唆された。

## P-114

当院の褥瘡有病患者のリハビリ依頼傾向の調査

大田原赤十字病院 リハビリテーション科<sup>1)</sup>、大田原赤十字病院 形成外科<sup>2)</sup>、大田原赤十字病院 看護部<sup>3)</sup>

はかまだ りょういち 袴田 亮一<sup>1)</sup>、呉 和英<sup>1)</sup>、川上小百合<sup>3)</sup>、  
石井 直弘<sup>2)</sup>

【はじめに】当院リハビリテーション(以下リハビリ)科では褥瘡を有している患者が多数おり、原疾患は様々である。しかし、褥瘡を主目的とした依頼は他の疾患と比較すると少ない。2010年2月～2011年2月の仙骨部褥瘡患者は50名おり、その内リハビリ介入は30名である。今回、仙骨部褥瘡患者でのリハビリの依頼傾向を調査し、リハビリ介入群・非介入群の二群に分け比較検討を行った。

【方法】2010年2月～2011年2月に、委員会を対象として挙げた仙骨部褥瘡患者50名をリハビリ介入群・非介入群に分割し、褥瘡と関連性の強い7項目(年齢・BMI・自力体動の有無・拘縮の有無・浮腫の有無・Alb値・DESIGN-Rscore)で有意差があるかを検討した。

【結果】7項目全てにおいて両群の間に有意差は見られず、リハビリ依頼傾向に統一性が見られなかった。

【考察】今回7項目の間では、介入群、非介入群に有意差は見られなかった。また、肺炎や脳梗塞に対してリハビリの依頼が多く、褥瘡を主目的としたリハビリの依頼は0件であった。後藤らは、関節の可動性が低下すると動作能力も低下し、臥位姿勢・座位姿勢の多様性の制限がおき、特定の身体部位の圧迫につながると述べ、大熊らは、離床を進め活動性を向上することは、褥瘡の予防や治療に大きく影響すると述べ、いずれも褥瘡に対してリハビリの有用性を示唆している。今回、両群の間に有意差が認められず、非介入群にもリハビリの介入が必要であったと言える。今後は、褥瘡発見時よりリハビリが介入することで早期の創部の改善・臥床からの脱却を図り、当院の褥瘡有病率の軽減に努めていきたい。

## P-116

スライディングシートの有用性について

松山赤十字病院 リハビリテーション科

いとう たかひろ 伊東 孝洋、田口 浩之

【目的】近年、介助者の身体負担軽減を目的として各種のスライディングシートが開発されている。スライディングシートは摩擦係数の少ない滑りやすい素材でできており、介護者にとってはずれが生じにくく、介助者は少ない力で移動させることができるという利点がある。今回ベット上側方移動時におけるスライディングシートの有無によるずれ力と介助者の身体負担に関して調査したので報告する。

【対象】介助者役は健康な成人17例(男性10例、女性7例)、平均年齢20.3±2.3歳である。患者役被検者は21歳男性(身長176cm、体重63kg)である。

【方法】介護者の仙骨部に簡易式体圧・ずれ同時測定器(プレディア)のセンサーを貼付し、介護者を介助者によりベット中央から右側方に20cm移動したときのずれ力を3回測定しその平均値をずれ力とした。スライディングシートは移座えもんシート(モリトール社)を使用し、ベットは普通マットレスを用いて測定した。また介助者の身体負担感についてはVASを用いて評価した。統計処理はエクセル統計2006で行い、対応のある2群間の差の検定はWilcoxon signed-ranks testを用い有意水準は1%とした。

【説明と同意】研究を行う前に文書を用いて説明を行い、署名にて同意を得た。

【結果】平均ずれ力はスライディングシートなしでは4.7±3.4N、ありでは1.8±1.2Nであり有意差を認めた(p=0.01)。身体負担感についてはスライディングシートなしでは6.9±2cm、ありでは3±2.7cmであり有意差を認めた(p=0.01)。

【考察】褥瘡において垂直応力だけでなく、剪断力(ずれ力)が褥瘡の発生や悪化の契機になるとされる。今回の結果から床上移動においてスライディングシートの使用により、ずれ力には有意に軽減し、また介助者の身体負担感においても軽減を認めた。したがってスライディングシートは有用であると考えられる。